

林業労働の継承に関する一考察

その不連続性の分析

A Study on Succession of Forestry Labor

蓬田伸光

- ① 研究の目的と方法
- ② 調査地と対象の概観
- ③ 林業労働請負会社で働く人達がおこなっている後継者の育成状況
- ④ 林業労働に従事するきっかけ
- ⑤ 農業との兼業先としての林業労働
- ⑥ 林業労働を子供にさせたくない理由
- ⑦ 林業労働にともなう楽しみ
- ⑧ 従業員がおこなう子供を林業労働に就かせないための策
- ⑨ なぜ社長は自ら林業労働の後継者を育成するのか
- ⑩ 考察

【論文要旨】

近年の日本では、林業労働に従事する新規参入者が減少している。この背景には、新規参入者となる可能性を秘めた若者だけの意向だけではなく、現在林業労働に従事している人達の意向も反映されている。つまり、現在林業労働に従事している人達のなかには、自分の子供には林業労働に従事してほしくないと考えている人も存在している。このような事態は本稿でとりあげる青森県V町でも認められる。だが、青森県V町では林業労働に従事している人達のなかでも、現場での作業に専門的に従事している人達は、自分の子供を林業労働に従事させていない。これに対して、林業労働に従事している人達を雇用している会社の経営に従事しながら現場での作業にも従事している人達は、自分の子供や親族や知人などを林業労働の後継者として育成し、林業労働の継承に努めている。そこで本稿では、この違いを生み出している原因について明らかにし、林業労働者が減少している理由を解明する際の新たなアプローチを提示することを目的とした。

一次資料の分析の結果、これまでの研究のなかで報告されていた点に加えて、林業労働者を雇用している会社の社長や経営者側の責任感と、社長や経営者の行為に対する同じ会社内の従業員による監視だけでなく、V町の他の林業労働請負会社で働く人達やV町の森林組合職員などからの監視の目があることで林業労働の後継者が育成されていることが明らかになった。

当該社会で生活する人々の行為が、他者との関わりのなかで規制されていることについては、文化人類学や日本民俗学などが議論の対象としてきた。林業労働者の減少といった問題、さらには林業労働をとりまく問題を扱うにあたって、従来の林業経済学を中心としたアプローチだけではなく、文化人類学や日本民俗学などからもアプローチも可能である。